

メロドラマ

火が点くアイズ

美野哲郎

人物

星流太（34）小劇場座長

三宅美穂（29）流太の元恋人

須藤六花（28）流太の恋人

小泉稔（31）美穂の恋人

○アパート・星の部屋（夜）

ドアスコープ覗く星流太（34）の瞳。

星「どちら様でしょうか？」

家の表に小泉稔（31）の姿。

小泉「初めました。劇作家の星流太さん、であらせられますよね」

星「なーんも、払える金ありませんよ？」

小泉「私、雑誌編集の小泉と申しまして」

小泉、懐の名刺に手を伸ばす。

星、即座にドアを開く。

星「取材ですか？ 仕事の依頼ですか？」

小泉、何も取り出さず手を出して。

小泉「失礼。私、三宅美穂の婚約者です」

星「は？」

小泉「上がりますよ。美穂――？」

小泉、ズケズケと上がりこみ、散らかった部屋を覗く。積みあがった段ボールに洗濯物。慌てて追う星。

星「なんなんですか、ちよつと勝手に」

小泉「こうも散らかってたら、頭こんがらが

って執筆も上手くないかないでしょう」

星「帰ってくれ。警察呼ぶぞっ？」

小泉、壁に飾られた、女性の目が大写真となった舞台のポスターを見る。

舞台『EYE, S』

『作／演出…星流太 主演…三宅美穂』

小泉「…美穂の目ですね」

星「四年前のね。三宅ならもうとつくに劇団抜けてますんで」

小泉「勘違いしない方がいい。アレが昔の男を頼るのは初めてじゃない」

星「知らないってば勘弁してよ」

小泉「何かあれば必ずこちらへ。では」

小泉、星に名刺を渡し、引き返す。

○アパート・外観（夜）

小泉、階段を下りて去っていく。

○同・星の部屋（夜）

積みあがった洗濯物の下から、三宅美

穂（29）がガバッと顔出し深呼吸。

美穂「信じてくれた？ 私の話」

星「俺は作家だぞ。たかが初対面の印象で他

人の人となりを決めつけると思うか？

…やっつてんな、あの目みりやわかる」

美穂「星くんの目読みは健在ね」

星、カーテン僅かに開けて外を覗く。

星「まだいるかな…」

美穂「油断しちゃいけない。そういう男」

星「ちよつと見て来る」

○アパート・表（夜）

星、路地の暗闇に目を凝らす。

誰も居ない。引き返すと道端に人影。

星「うわビックしたっ、六花」

須藤六花（28）、星を見て笑う。

六花「ひどくない？ 何それ傷つくよ私。彼

女が急に家訪ねちゃいけないんだ？」

星「言つたろ。次の戯曲書き上げるまで誰も

家に上げない」

六花「お片付けしてあげよっかなって」

星、階段上ろうとする六花引き留め。

星「ダメだ。今散らかってるすべてに意味がある。次のまとまった話が出るまで、あの部屋は俺の脳みそなんだ」

六花「はいはい。で、いつ書き終わるの？」

星「……いつか。いつかは終わるさ」

六花「……ねえ流ちゃん」

星「うん？」

六花「誰がなんと言おうとき、私は流ちゃんに期待してるんだからね」

星「……」

六花「そのいつかはきつと来る。いい作品書いてね」

星、思わずこみ上げる涙堪え、笑う。

六花、星を抱き寄せ、エール送る。

○アパート・星の部屋（夜）

星、疲れて布団に倒れ込む。

美穂「ごめん。後で謝つといて」

星「昔の女連れ込んでましたって？ ……美穂  
なんであんな男と付き合ってたんだよ」

美穂「だって……前は優しかったの。星くんと違って、私を優先してくれてた」

星「俺のせいってか」

美穂「そこまで言っていない」

星「目、見せてみろよ」

星、顔を近づけ美穂の目を覗き込む。

美穂「……」

星「ホラ俺に贖罪させたがってる」

美穂「そんな目はしてない」

× × ×

豆電球。並べた布団で眠る星。

風呂上りの美穂、脱衣所を出ると、

『EYE, S』のポスターを見る。

美穂「……自分への戒め？」

星「バカ野郎、俺の最高傑作だよ」

美穂「最後はプロジェクションで私の目の大  
写し。きっとそれで伝わるだろう……」

星「それで伝わらない客なら要らない」

美穂「……伝わらなかったね。誰にも。普通の人は、目読みなんかできないんだよ……誰も人の心なんかわからないよ」

× × ×

二人、互いに背を向けて眠る。

星「……じゃあ、俺は」

美穂「え？」

星「人の目に心が見える俺が描く物語は、誰にも届かないって事か？ このままずっと、前提が世界とズレたまま」

美穂「私はわかるよ。目じゃなくてずっと寄り添ってたから、少しは星くんの事わかる」

星「……」

美穂、星の手を握る。

美穂「頑張ってお客さんに寄り添いなよ」

星（手を振り払い）「彼女いる」

美穂、涙こみ上げ、すすりなく。

星「おい……？」

星、美穂の目を覗こうとするが。

美穂「見ないで」



星「お前ちよつと情緒ヤバいって。なあ、明日警察行くぞ」

美穂「もう行つた。被害妄想じゃないの、だって。ネットの変な相談所にも電話した、相談料超高かつたし意味なかった」

星「そりゃ……そりゃ、ネットの変な相談所に電話するからだろ？」

美穂「……（クスツと）それは、そう」

美穂、振り向いて星の目を見る。

美穂「……星くんの、私を見抜くような目が怖かったの。後ろめたくて。だって私の芝居は、求められてるものには程遠い」

『E Y E , S』のポスター。

美穂「あの私の目、嘘ついてた」

星、少し驚き。

星「そうか……お客さんには、伝わってたのか。俺の台本を、美穂の目が崩した」

美穂「……また書けそう？」

星「……」

星、体起こすとP C起動し執筆開始。

美穂、その背中を見て微笑む。

○コンビニ・表（早朝）

買い物袋を提げた星、出てくる。

○アパート・星の部屋（早朝）

星、玄関から上がってくる。

星「美穂起きたかー？ お前おほか以外なんでも平気だったよな」

美穂と話していた六花が振り返る。

六花「おかえりー」

星、愕然として買い物袋を落とす。

六花「大丈夫大丈夫、心配しないで。今、美穂さんから事情は聞きました」

六花、美穂の手を握り笑いかける。

六花「暫くうちにおいでよ。そしたら相手の人も流石にわからないでしょ」

美穂「え、本当に？ 助かります」

星「いや……悪い美穂、それは駄目だ。六花を危険に晒す事だけは」

美穂「あ」

六花「自分はよくて？ 流ちゃん最後に私を呼んだのいつか覚えてる？」

星「一カ月前お前んち行ったじゃん」

六花「そういう話じゃないよ」

六花、立ち上がって星に迫る。

六花「ここ、頭の中なんだよね？ スランプ続きの作家先生の。そう聞いてたけど」

星「美穂は急に来たんだって。事情聞いたんだろ？ 追い出せったのかよ」

六花「追い出してよ頭の中から。いつまでも新作書けないじゃんっ」

美穂「ごめんっ」

美穂、立ち上がり、頭を下げる。

美穂「ごめんなさい。私が悪かった」

美穂、荷物を手に玄関へ向かう。

○アパート・表（早朝）

美穂、足早に階段を降りて来る。

星「美穂っ」

星、追いかけてその手を引き留める。  
振り返る美穂。星、ハツとする。

美穂の向こう、遠くから作り笑顔の小  
泉が近づいてくる。

小泉「(恫喝の叫び) 美穂っ、ダメじゃない  
か人様に迷惑かけちゃあっ」

美穂、その声にビクツと身を縮める。

星「振り向くな。俺の目を見て」

美穂、星の目を見る。

階段の上から六花が顔を出す。

六花「流ちゃん暴力男ってあいつ？」

小泉、後ろ手にナイフを握りしめる。

小泉「そこを動くなよ？ 美穂」

六花「美穂さん戻って。鍵かけよ、早くっ」

星と美穂、互いの目を見つめ合う。

星「俺の目。何言ってるかわかるか……？」

六花「ねえ流ちゃんっ、戻ってっ」

小泉、ふたり目がけて足を速める。

美穂、星の目を見つめ、うなづく。

星、美穂の手を引き、駆けだす。